

# 「国立医療における「ウェルビーイング」の所在 「患者の立場に立ったより細かな対応」を行える 相談体制たりうるためには」

西城春彦

第63回国立病院総合医学会  
(平成21年10月23日 於仙台)

IRYO Vol. 64 No. 9 (579-580) 2010

**要旨**

平成21年10月24日、仙台市で行われた第63回国立病院総合医学会のシンポジウム『国立医療における「ウェルビーイング」の所在 「患者の立場に立ったより細かな対応」を行える相談体制たりうるためには』を座長の立場からまとめた。本シンポジウムを企画した漆畑真人氏の基調報告と、津川忠久氏、近藤陽介氏、久保裕男氏、篠原純史氏の4氏の実践報告を行った。各報告を通して、ソーシャルワーカーの実践の多様性が認識させられたが、それらは今回のシンポジウムのテーマ「ウェルビーイング」(生活の安定を図って、その人らしい生き方を支援する)を要(かなめ)として、扇のように広がったもの、と考えられよう。生活に密着した実践は、生を支える院内・地域を巻き込んだ実践から、満足ある死をいかに迎えるかの援助まで、幅広い。各シンポジストの論文を読んでいただければ、と思う。フロアからの発言では、他職種の方より、初めてこのような報告に接し、もっと積極的に業務や実践をアピールすべき、という意見があった。また、ソーシャルワーカーからは、施設から期待されることと、自身がすべきと思うこととの乖離かいりが大きい、という意見が出された。これは施設内にとどまる問題ではなく、医療福祉制度に深く関わっている。今後、実践報告を積み重ね、地歩を固めていくことが、何よりも大切だと思う。

**キーワード** ウェルビーイング, ソーシャルワーカー, 生活, 実践**座長から**

本文は、平成21年10月24日に、仙台市で行われた第63回国立病院総合医学会のシンポジウムでの発表

をまとめたものである。4人のシンポジストが各自の業務、ソーシャルワーク実践を報告し、また漆畑真人氏はこのシンポジウムの基調報告の形で考察を述べた。私は、このシンポジウムの座長として、司

国立病院機構災害医療センター 医療相談係

別刷請求先：西城春彦 国立病院機構災害医療センター 医療相談係 〒190-0014 東京都立川市緑町3256

(平成22年3月10日受付, 平成22年7月9日受理)

Status of "Well-being" in National Hospitals: To Establish a Consultation System Enabling Finely-tuned Responses from a Patient's Standpoint

Haruhiko Saijoh, NHO Disaster Medical Center

Key Words: well-being, socialworker, life, practice

会・進行を担当した。

実践報告4編は、実に多様な実践があることを実証したように思う。いかに、生活を支えていくか、という援助から、満足ある「死」をどう迎えるか、というものまで、一見すると対照的、とさえ思える。しかし、シンポジウムを進めるうちに、基調報告で漆畑氏が語った『ウェルビーイング』を扇の要として、そこから広がっている、と考えるのが自然では、と思えるようになった。つまり、形はさまざまでも、それは生活の多様性多面性によるもので、生活に密着した実践は、本来このような姿であろう、ということである。

4人の方々の報告は、それぞれの論文を読んでいただくとして、シンポジウムでの発表の印象を簡単にお伝えし、全体の雰囲気や少しでもご理解いただければと思う。

NHO三重中央医療センターの津川忠久氏の報告では、三重県の地域性に沿ったきめ細かな実践が印象に残った。言葉にするとさらさらと流れて行ってしまいが、個々の機関と関係を構築していくことは、実際、容易ではない。

国立療養所栗生楽泉園の近藤陽介氏は、歴史の重荷を背負ったハンセン病療養所での実践を語った。平均年齢80歳を超え、年々減少する入所者を前に、「終つひの棲家すまいか」として、入所者の最期を見守ることが業務の重要な部分になっているという。私にとっては、論評するのはばかも憚られるような重い報告だった。

NHO南九州病院の久保裕男氏は、重度神経難病患者の在宅療養をテーマに、写真をまじえて、わかりやすく報告された。制度が未整備な時期からの、地域を巻き込んだ退院支援で、連携・調整の必要性という説明に説得力を感じた。

NHO高崎病院の篠原純史氏は、HIV感染者に対する社会の認識のなさが生活に及ぼす影響を、多様な支援で対応していることが報告された。印象に

残ったのは、「クライアントの主体的な課題解決」と「地域のコーディネート」という言葉だった。立場をはっきりさせた前向きな取り組みを応援したいと思った。

国立精神・神経センター病院の漆畑真人氏の基調報告では、今回のシンポジウムのキーワードである「ウェルビーイング」を説明した。国立病院の多くが独立行政法人化したあと、ソーシャルワーカーは倍増した。これから、制度面でもソーシャルワーカーの地位を確立していくことが必要だろう。

以上の5名のシンポジストの報告のあと、フロアからの発言をお願いした。ソーシャルワーカー以外の職種の方々にとっては、初めてソーシャルワーカーの実践報告を聞いた方も多かったようだ。フロアからシンポジストに、「皆さんの施設でこの報告をしたことがありますか」と質問があったが、誰もいなかった。そこで、もっと所属施設でも地域でも是非報告してください、もったいない、という意見が出た。実は、本特集もその一環で、出席されていた本誌編集委員からご依頼をいただいた。

本シンポジウムは、国立病院総合医学会において、初めてソーシャルワーカーが主催したものである。フロアからの質問にもあったが、ソーシャルワーカーが所属施設から求められるものと、ソーシャルワーカー自身がすべきと思っていることが、必ずしも一致していない現実がある。それは、施設内の問題ばかりとはいえず、医療福祉制度そのものに根差す部分も大きい。ソーシャルワーカーだけの問題だけでもないだろう。

今後、実践報告を重ね、地歩を固めていくことが、ソーシャルワーカーには何よりも大切だと、強く感じる。司会・進行をつとめた者として、このシンポジウムが、その一つの契機になったとすれば、幸いである。